



Title	非全身曝露型化合物を指向した腸管NaPi阻害薬の創製 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	前本, 道寛
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(薬科学)
Dissertation Number	甲第15320号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/89876">https://hdl.handle.net/2115/89876</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Michihiro_Maemoto_review.pdf, 審査の要旨



## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（薬科学） 氏名前 本道 寛

審査担当者	主査 教授	周 東 智
	副査 教授	市 川 聡
	副査 准教授	渡 邊 瑞 貴
	副査 准教授	薬師寺 文 華

## 学位論文題名

非全身曝露型化合物を指向した腸管NaPi 阻害薬の創製

博士学位論文審査等の結果について（報告）

腸管からのリン酸塩の吸収機構は完全には解明されていないものの、ナトリウム依存的な能動輸送およびナトリウム非依存的な細胞間隙を介した受動輸送の二つの独立した経路を介していると広く認識されている。腸管に発現している NaPi2b は食事性無機リン酸塩の吸収に大きく関与していると推察されていることから、腸管の NaPi2b を阻害する治療薬は経口リン酸塩吸着剤よりも低用量で血清リン酸塩濃度の低下が期待できると考えた。一方で、NaPi2b は腸管だけでなく肺や精巣にも発現しており、NaPi2b 遺伝子の変異は肺胞小石症や精巣小石症に関連していると報告されている。それゆえ、腸管吸収により全身に分布する NaPi2b 阻害薬を用いた際には、異所性石灰化のようなオンターゲットの副作用が懸念される。以上より、筆者は、経口リン酸塩吸着剤に比べて低用量かつ副作用の懸念なく使用できる高リン血症治療は、経口投与後に腸管吸収されて血中に分布することなく腸管局所で作用する強力なリン酸塩取り込み阻害活性を示すNaPi2b 阻害薬により実現できるのではないかと考え、創薬研究を実施した。

リード化合物取得に向けて、ヒトNaPi2b 発現KJMG8 細胞を作製し、<sup>33</sup>P-ラジオ標識リン酸塩の取り込み測定によるスクリーニングを行った。協和キリンの化合物ライブラリーから、化合物**3** (IC<sub>50</sub> = 87 nM) を強力なリン酸塩取り込み阻害活性を示すヒット化合物として取得した。

種々検討の結果、両性イオン体 **15** は強力なリン酸塩取り込み阻害活性を示し (IC<sub>50</sub> = 64 nM)、ほとんど膜透過性を示さなかった (P<sub>e</sub> < 0.025 × 10<sup>-6</sup> cm/s)。また、7 時間後の血漿中濃度及び肺濃度は検出限界以下であった。ラットへの経口投与におけるバイオアベイラビリティは0.1%であり、ほとんど経口吸収性を示さないと推察され、望みの動態プロファイルを示す化合物の取得に至った。

ラット腸管ループ試験において、NaPi2b が高発現している空腸に両性イオン体 **15** (0.1 mg) を投与したところ、ビークル群と比較してリン酸塩の吸収作用を17%阻害した。本結果は、臨床で使用されている塩酸セベラマーを投与した際のリン酸塩吸収阻害作用 (16%, 5.8 mg; 19%, 7.8 mg) と同程度であった。以上から、低膜透過性を示し、腸管局所でNaPi2b阻害作用を示す非全身曝露型コンセプトによるリン酸塩吸収阻害作用を *in vivo* で確認できた。一方で、両性イオン体 **15**はアシルヒドラゾン構造を有しており、反応性代謝物による毒性の懸念がある。そこで、リスクの低減に向け、アシルヒドラゾン構造を回避した化合物の取得を目指した。

誘導体展開の結果、アシルヒドラゾン構造の代替構造としてアニリド誘導体を取得した。中でも、両性イオン体**30**は強力なリン酸塩取り込み阻害活性を示し (IC<sub>50</sub> = 14 nM)、ほとんど膜透過性を示さなかった (P<sub>e</sub> < 0.090 × 10<sup>-6</sup> cm/s)。また、ラットへの経口投与において低バイオアベイラビリティを示しており (FaFg = 5.9%)、ほとんど経口吸収性のない化合物であった。

両性イオン体 **30** を用いて、ラットにおけるリン酸塩吸収阻害作用を評価した。臨床で有効性を示す経口リン酸塩吸着剤である炭酸ランタンを陽性対照として使用した。本試験においては、リン酸塩濃度10 mM を生理的なリン酸塩濃度として、リン酸塩濃度100 mM を高濃度条件と設定して評価した。10 mM リン酸塩条件下では、ビークル群と比較して、両性イオン体 **30** は44% (3 mg/kg, p.o.)、36% (10 mg/kg, p.o.)、55% (30 mg/kg, p.o.) のリン酸塩吸収阻害作用を示した。一方で、100 mM リン酸塩条件下では、ビークル群と比較して、11% (3 mg/kg, p.o.)、14% (10 mg/kg, p.o.)

とリン酸塩吸収阻害作用が低減した。本結果から、両性イオン体 **30** は、リン酸塩濃度10 mM の生理的条件下では NaPi2b を介した能動輸送が優勢であると考えられる一方で、リン酸塩濃度100 mM 条件下では受動輸送が優勢であると推察された。

以上より、低膜透過性で非腸管吸収性を示し、腸管局所で強力なリン酸塩吸収阻害作用を示す両性イオン体 **30** は、新規な高リン血症治療薬としての可能性が示唆された。加えて、併用療法による炭酸ランタンの服薬量低減の可能性および、下痢や便秘などの経口リン酸塩吸着剤に関連する消化管の副作用の低減も期待され、新たな治療薬としての展開が期待される。

以上述べた成果は、薬化学の発展に大いに寄与する学術的価値が高い研究業績であり、北海道大学博士（薬科学）の学位を授与するに十分値するものと判断した。